



小説

比企の尻

—慈愛—源頼朝と比企の尻

大内一郎

まつやま書房

はじめに

埼玉県の中央に、比企郡という地域があります。

比企という地名は、今から一五〇〇年前・六世紀にまで遡るといふ説が伝えられています。

そして、十二世紀に、この地に移り住んだ一族が比企氏を名乗り、この地方を治めました。

『比企の尼（ひきのあま）』も、比企氏一族の一人です。

しかし、現在、比企の地に住む人たちですら、『比企の尼』を知る人はわずかです。

「何故」でしょう。

織田信長・豊臣秀吉が天下取りを目指した戦国時代。

坂本龍馬・西郷隆盛が奔走した幕末時代。

同じように、源頼朝・平清盛が源平合戦を繰り広げた平安末期から鎌倉時代も、多くの歴史ファンを魅了してやまない日本史の大転換期です。

また源平時代は、奥州の王者・藤原秀衡が黄金の仏都・平泉を築いた時代でもあり、平泉は、日本最高のヒーローの一人、源義経・終焉の地でもあります。

そして、歴史を彩り、時に盟主として君臨したのは、男たちばかりではありません。

淀君・篤姫・北条政子といった女性たちも、歴史の表舞台に立つて華々しく活躍しました。

ところが、のちに征夷大將軍となる源頼朝を支え続け、『源頼朝の大恩人』、『鎌倉幕府誕生の大功労者』とまで言われる『比企の尼』という女性の存在を知る人はほとんどいません。

「何故」でしょう。

頼朝の生きた時代は、古代と呼ばれた奈良・平安時代から中世と呼ばれる鎌倉・室町時代への大転換期でした。貴族の世の中から、武士の社会へと移った時代でもあります。

『比企の尼』は、日本史の新しい世紀をつくった重要なキーマンとも言われます。

しかし、学校の教科書はもちろんのこと、人物・人名辞典にすら、その名前が登場しません。「何故」でしょう。

そもそも、『比企の尼』という女性は、どんな人物で、どんな事蹟を残した人なのでしょう。

『源頼朝の大恩人』、『鎌倉幕府誕生の大功労者』と呼ばれるほどの評価をされるのならば、

「何故」、その理由、その根拠が語り継がれないのでしょうか。

私は、物語を書くという方法で、『比企の尼』の足跡（生涯）を旅してみたいと思います。

そして、今から約八〇〇年前、「鎌倉幕府を開いた源頼朝を支え続けた」にもかかわらず、

歴史の表舞台から消えた『比企の尼』という女性が、どんな道を歩んだ人物だったのかを辿ってみたいと思います。

※この物語は、伝承に基づいた推理を紡いだフィクションです。

◎目次

はじめに | 1

第一章 『慈愛の母・比企の尼』 | 6

第二章 『伊豆・蛭ヶ小島』 | 48

第三章 『挙兵／治承・寿永の内乱』 | 69

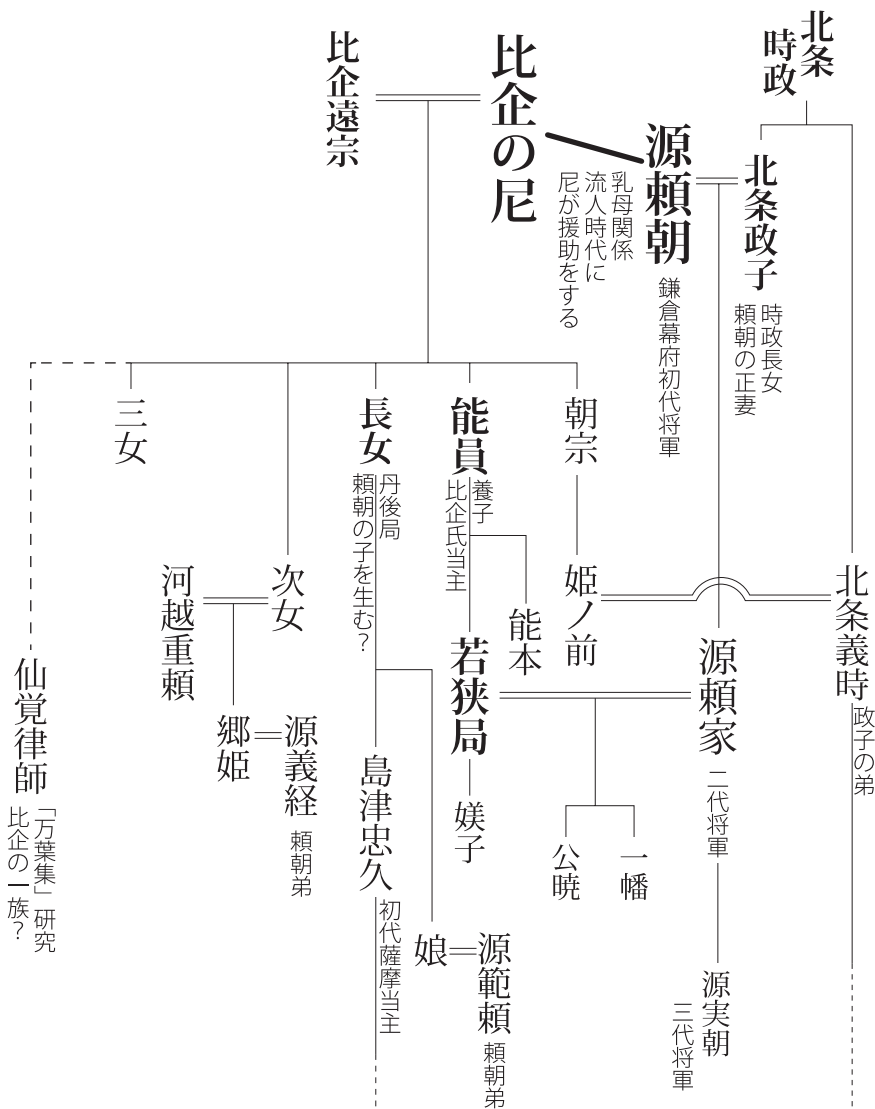
第四章 『木曾の源義仲』 | 119

第五章 『平家滅亡』 | 153

第六章 『鎌倉幕府誕生』 | 182

参考年表・参考文献	275
おわりに	272
第八章 『比企の里』	238
第七章 『征夷大將軍』	226

◆比企氏関係系図（本書内容準拠）◆



第一章 『慈愛の母・比企の尼』

一段 『平治の乱』

一一五九年十二月。

のちに『平治の乱』と呼ばれる戦いで、河内源氏かわちげんじ（大阪府東部）の棟梁・源義朝よしたも（頼朝の父／三七歳）は、伊勢平氏（三重県、愛知・岐阜県の一部）の棟梁・平清盛きよもり（四一歳）率いる平家軍に挑みました。義朝軍は、緒戦で後白河上皇（第七七代天皇／三十二歳）と二条天皇（第七八代／十六歳）を拘束し、臨時政権を樹立します。

しかし、清盛軍は、上皇と天皇の奪還に成功し義朝軍を破りました。

義朝は、清盛に敗れただけでなく、朝敵という謀反人のレッテルまで貼られてしまうのでした。

「朝敵・源氏に連なる者は、すべて捕らえて根絶やしにしろ！」

勝者・清盛の対応は、迅速で容赦ないものでした。

一方、敗者・義朝は、再起を期して、朝長あさなが・頼朝の二人の息子と東国へ向かっています。

ところが、頼朝（十三歳）は、一人、美濃・関ヶ原（岐阜県南西部）の雪の中で道に迷ってしまい、次兄・朝長（頼朝の異母兄／一六歳）は志半ばで落命し、義朝も家来の裏切りで殺されてしまいました。

父、兄とはぐれていた頼朝は、とうとう平家の追っ手に見つかり、生け捕りにされてしまいました。すでに長兄・義平（頼朝の異母兄／一九歳）は処刑されており、頼朝にも同様の運命が待っていました。敵の子どもは、男児であれば必ず殺されてしまうのが習わしです。

頼朝の命など、とても助かるはずがありません。

処刑の日は、一一六〇年二月十三日と決められました。

源平合戦の幕は、ここで閉じられるはずだったのですが……、ところが……、ところが……、ところが……、信じられない奇蹟が起りました。

清盛の継母・池の禅尼が、

「頼朝は、二十三歳で病死した家盛（池の禅尼の実子／清盛の異母弟）にそっくりじゃ。

流罪に減刑して生かしておくれ」

と、頼朝の助命を嘆願したのです。驚いた清盛は、これを即座に拒絶しました。

「母上様。頼朝は、すでに十三歳。しかも、こたびの戦に参陣し、平家に弓を引いた源氏の嫡男ですぞ。生かしておけば、必ず将来の災いとなります！」

しかし、池の禅尼の懇願は尋常ではありません。

「清盛殿。頼朝は、去る年、父のみならず母まで亡くしたそうではないか。

しかも、尋ねてみれば、『死んだ一族の供養のために、生きて菩提を弔いたい』と、ひたすら経文を読んでいるとのこと。将来の災いなど杞憂でござらう」

「母上様！ 頼朝は、義朝とともに東国へ向かっていたのですぞ。」

これは、坂東ばんとう（関東地方）の武士たちを束ねて、源氏勢力の巻き返しを図ったに相違ありません。頼朝を生かしておくことなど絶対に出来ませぬ！」と、はっきり宣告しました。

しかし、池の禪尼は、命乞いを諦めることなく、ついには食まで断ってしまいました。清盛は、とうとう根負けし、頼朝は罪一等を減じられ死罪から流刑となりました。

一四歳になった頼朝の配流先は、伊豆の国（静岡県・伊豆半島）の蛭ヶ小島ひるがこじまと決まりました。蛭ヶ小島は、海上にある孤島ではなく、伊豆の国の中央部を流れる狩野川かのがわの中州なかすの一つです。清盛は、頼朝の配流に対して大いに不満でしたが、

——いづれ、頼朝の監視役、伊豆の北条時政（二十三歳）か伊東祐親いとうすけちか（六十歳前後）に命じて始末してしまえ！……と心の中では決めていました。

源氏は没落し、ここに、約二十年間に及ぶ平家繁栄の時代が開かれるのです。

頼朝は、『平治の乱』（一一五九年）に敗れ死罪を宣告されますが、助命されて二十年後に挙兵します（一一八〇年）。そして、平家を倒し、『鎌倉幕府』を開きます（一一八五年）。

この頼朝の二十年間を支え続けたのが、他ならぬ『比企の尼』なのです。

これが、比企の尼は、『頼朝の大恩人』、『幕府誕生の大功労者』である、と言われる所以です。

《『平治の乱』は、一一五六年の『保元ほうげんの乱』という朝廷内(皇族・摂関貴族)の権力闘争に端を発するものです。

『保元の乱』は、皇位継承権に不満を持つ天皇(後白河／二九歳)と上皇(崇徳すどく／第七代／三八歳)との院政をめぐる争いに貴族が絡んだものです。この衝突が、武力を持って朝廷に仕えていた源氏と平氏を巻き込んだ戦いへと発展しました。

『保元の乱』で発揮された武士(源氏と平氏)の力は、中央政界進出の契機となりました》

《崇徳上皇は、鳥羽とぼ天皇(第七四代)の第一皇子で、後白河天皇(七七代)は第四皇子です。

第七六代天皇の近衛このえ帝(一一五五年崩御)は第九皇子です。三人の皇子は兄弟です》

《『保元の乱』で同士だった平氏の平清盛と源氏の源義朝は、朝廷からの恩賞の格差(清盛に厚く、義朝に薄い)が原因で、『平治の乱』という勢力争いを起こします。

『保元』／『平治』の乱は、武士が朝廷の権威を左右する歴史の大きな転換点となるのです》

《『院政いんせい』とは、天皇に皇位を譲った上皇(あるいは法皇(出家した上皇))が、天皇に代わり直接に政務を行うことです。その理由は、自分の子孫を皇位に継承させるなど、上皇になると、自分の意思を自由に反映できるからです》

二段 源頼朝

源頼朝は、一一四七年、尾張の国（愛知県）で生まれました。

河内源氏の棟梁・源義朝が、熱田神宮（名古屋市の大宮司の娘・由良御前（一一五九年三月歿）を正室とし、二人の間に授かった男児が頼朝です。熱田神宮は、『三種の神器』の一つ、草薙神劍（くさなぎのみつるぎ）を祀ったと伝えられる由緒ある神社です。

『三種の神器』とは、皇位の証を示す、「草薙の劍」・「八咫鏡」・「八尺瓊勾玉」、の総称です。

頼朝は、母の異なる二人の兄を持つ三男でしたが、生母・由良御前の実家の後見があつて、源氏の跡継ぎである嫡男に立てられました。頼朝が、罪一等を減じられて死罪を免れたのは、池の禪尼の命乞いだけでなく、この熱田大宮司家からの働きかけもあったのです。

父・義朝、母・由良御前の二人は、源氏の嫡男・頼朝に対して、

「源氏を名乗る者は数あれど、われら河内源氏こそ、清和源氏（第五六代／清和天皇）の本流なるぞ。そなたこそ、将来、源氏を束ねる棟梁なるぞ」と、言い含めて育てました。

このため頼朝は、『平治の乱』の際の臨時政権で、わずか十三歳にして従五位下・右兵衛権佐（うひょうえごんのすけ）という官位・官職に任命されたのです。

《頼朝の官位・官職は、戦に敗れたため剥奪されますが、頼朝に仕えた御家人たちは、頼朝に敬意を払って、

後々まで「佐殿」呼ぶようになります。

兵衛佐は、中国の名称で「武衛將軍」というので、頼朝は「武衛」と呼ばれることもあります。

*この物語では、「頼朝様（殿）」で統一させていただきます《

三段 牛若丸（源義経）

義朝には、常磐御前という美しい愛妾がいました。

二人の間には、「今若」（のちの〈阿野全成〉）・「乙若」（のちの〈義円〉）・「牛若」という八歳・五歳・二歳の三人の男の子がいました。頼朝とは母の異なる弟たちです。

義朝を倒した清盛は、一目で常磐御前の美貌に魅せられてしまいました。そして、

「わしの言うことを聞けば、子どもたちの命だけは助けてやる」という条件を突きつけました。常磐御前は、子どもたちのために泣く泣く清盛の言うことに従いました。

子どもたちは、僧侶になるため別々の寺院に預けられるのですが、鞍馬寺（京都市）に送られた末弟の牛若こそ、二五年後の一一八五年、『壇ノ浦の戦い』で平家を倒す『源義経』その人なのです。

四段 比企遠宗と比企の尼

さて、東海道を下って伊豆に護送される頼朝を追うように、東山道（のちの中仙道と奥州街道）を通って、武蔵の国（主に、東京都・埼玉県・神奈川の一部）の「滑川の里」（現在の比企郡滑川町）・和泉へ向かう一組の夫婦がいました。比企遠宗と、その妻・比企の局です。

比企の局は、一一四七年に尾張で生まれて京で育った頼朝に乳を与えた乳母の一人です。比企の局は、学問があり雅さも備えていたので、頼朝の父・義朝から厚く信頼されていました。

比企の局は、頼朝に乳を与えただけではなく、源氏の嫡男に相応しい教養を授けようと熱心に育てました。頼朝も、その期待に必死に応えようと思いました。

比企の局は、頼朝と過ごすうちに、その知性に並々ならぬものを感じました。と、同時に、時おり見せる冷たさのようなものを心配していました。

——頼朝様には、もっともっと愛情が必要なのかもしれない。

比企の局は、三人いた自分の娘たちと同じように、頼朝に愛情をそそぎました。

頼朝も、比企の局を実の母のように慕いました。

《乳母とは、母親に代わって乳を与え子育てする女性のことです。

養育された子は、「乳母子」と呼ばれました。養育には夫婦で係ることも多く、乳母子と養育夫婦は、格

別な絆を結ぶようになるのです》

夫の比企遠宗は、武蔵の国・比企郡を本拠地とした豪族で、源義朝が、源氏ゆかりの地・鎌倉に居を構え坂東の勢力拡張に努めた際、その家人となりました。

義朝に従って京へ上りますが、『平治の乱』に深く巻き込まれることは免れました。

しかし、京に留まることなく、妻とともに東国へと向かうのでした。

頼朝の行く末を案じていたからです。

《遠宗は、平家にとつては敵方です。しかも、頼朝の乳母夫（めのと・めのと）ぶ／乳母の夫でした。しかし、比企郡の郡司ぐんじを任せられ、ここを請所うけしよとして与えられました。

請所とは、領地の現地支配を任せられるかわりに、年貢の納入を請け負うことです。

武蔵の国には二十二郡ありましたが、その一つ比企郡が遠宗の本拠地だったので郡司に任命され請所として与えられたのです。当時の武蔵の国の知行国ちぎょうこく（主）は平清盛でした。清盛は、わずか九歳の四男・知盛とももりを武蔵の国の国司こくし（武蔵守）としました。

知行国（主）も国司も、任命権は朝廷にあります。ですから、朝廷が、清盛を武蔵の国の知行国（主）に任命し、朝廷が、清盛の推薦により知盛を国司（国守）に任命したわけです。清盛も知盛も、武蔵の国に下向することなく、現地支配は目代めだて（代官）に任せられました。

平知盛は、成長した一一八五年、『壇ノ浦の戦い』で、平家の総大将として、源氏の総大将・源義経と戦

道中の二人に、ほとんど会話はありませんでした。けれども、胸の奥底では同じことを思いながらの帰郷でした。いよいよ武蔵の国に入るといふ時、『平治の乱』以来、少し具合を悪くしていた遠宗が、ようやく重い口を開きました。

「奥州しかない。奥州しか……。だがのお……」

「奥州？ あなた様も、そうお考えでしたか」

「そなたも、同じ思いだったのか？」

「はい。ただ、わたくしは、頼朝様のおそばに仕えておりました。

源氏のご嫡男・頼朝様のご気性、そして、今は流人の身とはいえ、京で育った頼朝様の気位を考えると……、奥州の力にすがろうというのは……」

「それは、わしにも分かる。わしとて武蔵の国・二十二郡の郡司の一人。

頼朝様のお暮らしを支えるだけなら、比企の豊かな産物で十分賄える。しかしながら、これは、頼朝様へ食べ物や衣料を運べばよいというだけのことではない」

「承知しております」

「比企から伊豆までの道のりは、危険極まりない。源氏にゆかりのある坂東の豪族たちですら平家になびいてしまった今、どこの誰が平家と通じているのか分からない。

その平家の目をかすめながら、道中を無事に行き来できるとは到底思えぬ。